

## 上代オホヲ音節の結合的性格

森山, 隆

<https://doi.org/10.15017/2332832>

---

出版情報 : 文學研究. 60, pp.83-108, 1961-03-20. 九州大学文学部  
バージョン :  
権利関係 :

## 上代オホヲ音節の結合的性格

森 山 隆

上代「オ」「ホ」「ヲ」音節の結合的性格

一

いわゆるオ列音節、すなわちオコソトノホモヨロヲの各音節の中で、コソトノヨロの六音節に奈良時代までは甲乙兩類の特殊仮名遣の区別が存在し、古事記にはモにも甲乙兩類の区別があったとされている。また、ソトノヨロ各音節は奈良時代にすでに混用された事例が存在するが、コは東国方言を除いては、奈良時代を通じて混用の徴証がなく、降っては文献的には新撰字鏡の訓注にも甲乙二類の書き分けが徴されるといわれる。このことから一般にオ列は—コソトノモヨロ各音節は、かつては明確に甲乙二類が区別され、漸次時代を下るにしたがって、音節により多少の遅速はあっても、次第に混用から混乱に進み、平安初期には大体いづれか一方に吸収統一される傾向にあったと見られている。この音韻変化現象を逆推すれば、奈良時代に書き分けが無いとされるオホヲの三音節も、奈良時代を遡る時代には、他のコソトノモヨロ各音節と同様に、甲乙二類の区別が存在していたのではないかとの推測が可能である。したがって文献上にそれらの区別の痕跡を確め得るなら、オホヲの三音節にも上代日本語を遡る古代日

本語の時代において、甲乙二類の区別が存在したであろうことをほぼ確認できるだろう。その意味で特にオホ二音節が古事記において書き分けられていたとする見解、または崩壊途上にあるとする立場は、注目すべきものがある。ただ、その痕跡の検出に際しては次の点に留意する必要があると思われる。

第一に、オホヲ書き分けの予想は、現実に書き分けのあるコソトノモヨロの甲乙に対応する音韻関係にあるので、検出されたオホヲ甲乙兩類の性格は、おおむねコソトノモヨロ甲乙兩類の性格と矛盾背馳するものでなく類同的性格を保持するものであるだろう。第二に文証ある歴史時代に書き分けの痕跡が存する時、使用された字母の性格は漢字音の面からも用字法体系の面からも破綻なく説明されねばならない。オホヲの各音節を表記する字母の種類が二種類以上あって、それぞれ甲乙兩類にわかたるべき音韻上の弁別の特徴を有している、というだけでは実は不十分である。該字母の使用が伝統的用字法の踏襲であるか、資料の性質の相違によるものであるか、個人的なブレをもつ用字法の結果であるか慎重に見究める必要がある。

小稿においては、以下上代におけるオホヲ三音節の結合状態を

調査し、他のオ列甲乙兩類の結合的性格を参照しつつ、その書き分けの痕跡を検討してみることとする。

## 二

オホラ三音節の結合を調べるに際して、その比較対照さるべき他の甲乙兩類の書き分けのあるオ列の結合について、有坂秀世博士は次の様に述べて居られる。

第一則、甲類のオ列音と乙類のオ列音とは同一語根（動詞は語幹）内に共存することが無い。

第二則、乙類のオ列音はウ列音と同一語根（動詞は語幹）内に共存することが少い。

第三則、乙類のオ列音はア列音と同一語根（動詞は語幹）内に共存することが少い。

この中確實に言ひ得ることは

1 甲類のオ列音と乙類のオ列音とは同一語根（動詞は語幹）内に共存することが無い。

2 ウ列音とオ列音とから成る二音節語根において、そのオ列音は乙類のものではあり得ない。

といふ二つの事実であり、その他は寧ろ傾向といふ程度のものである。

この結合の法則が、オホラ三音節に甲乙兩類の区別が存在していた場合に、ほぼ同じ様な形で見出されるであろうといふことは当然考えられることである。また、オホラ三音節が甲又は乙のいずれか一方に最初から一類として存在していた場合、やはり音節結合の法則に従って甲（○）又は乙（◊）のいずれかの性格を荷っていたと考えられる。オホラ三音節が同じオ列を構成する他の

コソトノモヨロ七音節と、全く異なる性格をもっていたとは考えることができない。したがって、甲類コソトノモヨロ、および乙類こそともよろ、の性格はかなり有力な比較材料となるであろう。

オ列甲類の結合的性格において、オ列乙類と最も明瞭に相違する点は、ウ列との結合例をもつということである。音韻変化の結果生じた形や、甲乙兩類の混同と見られる諸例を除外すれば、u—◊の結合を示す結合単位の明白な事例は存在しないと看られている。

(イ) 母音の脱落によって生じた縮約形と思われるもの。

とユラ宮（豊浦宮、元興寺丈六光範、よクス（横曰、記紀）（とユウケ神（記）も後母音ウの影響によって生じた形であろう）

(ロ) 複合語的性格をもつもの。

のニス（如、記、万葉）、もニユラニ（記）フニもと（麓、万葉）とニブサ（樹末？、万葉）オよニツレ（妖言、万葉）

(ハ) 本来、u—◊結合であったものが◊の混同によって生じた形。  
ススrof（嚙、万葉）マツrof（奉、万葉）、

ウツrof（交、万葉）、カレグロシ（黒、万葉）

右の諸例に徴するかぎり、二音節構成のu—◊結合は極めて安定したものであったと思われるが、有坂博士も疑問を残された次の例は検討の必要があると思われる。

(記、上) 賦登麻和訶比売（賦登、真福寺本ナシ）

賦登はフトニ（太）の意であると思われるが、これについて有

坂博士はフト(太)のトは記紀万葉においてすべてト(甲)で記されてをり、右の賦登の登は誤字ではないかと疑って居られるがフトのトが乙類として存在した傍証に次のような例がある。

蘇奈久羅乃布等多麻斯支乃跡己等(天寿国曼茶羅繡帳銘)

敏達天皇の表記は、(記) 沼名倉太玉敷命、(法王帝説) 怒那久良布刀多麻斯支天皇と仮名書きの例が見えるので、(太)の意味をもつフト(甲)がフト(乙)の形で使用されていたことはほぼ認めてよいことと思われる。ついでに述べるならば、繡帳銘にはト(甲)と(乙)にそれぞれ刀等を書きわけている模様で、等巳刀跡々(聰一例)、跡己等(命、九例)、等巳(豊、五例)の諸例が見える。使用字母に帰里きりよ己よ卷ま奇か至し居い移けなどの、奈良時代の常用字母体系に合致せざるもののあることは周知の通りである。また賦登の「賦」字は古事記においては本文にのみ六例、伊賦夜坂(上巻)、大倭根日子子賦斗迦命(孝安記2例、孝靈記1例)波邇賦坂(履中記)の例に限られ、歌謡及び訓注には使用されぬ特色ある字母である。ト(甲)と(乙)兩類の混用は、すでに古事記にも雄略記歌謡(一〇四番)に登良1例、斗良3例、斗理1例、何れも(取る)の意の語の混在する例があるので、おそらくフト(乙)の語もフト(甲)と共に存在していたものと思われる。

しかしながら、他のu-i-o結合の事例に、o-i-öの混同によって生じたと思われるu-i-ö結合の確実な事例は存在せず、このことからuと結合するオ列は、本来的にはo(甲)相当の性格をもつと見てよいと思われる。

次に問題になるのはア列と結合するオ列乙類の場合である。母

音調和の痕跡を上代日本語において容認する立場からすれば、舌的性格をもつと推定されているオ列乙類が、後舌的と推定されるア列と結合関係をもつことには、否定的であるのは当然である。問題は上代に見られるa-i-ö結合が本来的なものであるのかまたは母音調和のやや崩壊した形のものであるのか、その誘因が他の音韻変化、母音交替現象の類推によるのか、更には上代のaはかつてはaおよびäに溯ることができて、aおよびäが上代のaに吸収統一された結果、もともとä-i-ö結合であったものがa-i-ö結合の事例として上代に残存しているものであるか、推測の限りではない。したがって、もっぱらまず上代に残存するa-i-ö結合について調べてみると大体次のような分類になる。

A ほぼ一語的結合かと思われるもの

(i) (記) そバ(爪稜?) アそ(親称) マろ(自称)

(紀) そバ(稜?) アそ(親称) マろ(自称) カそ(父)

マそ(全)

(万) アそ(親称) マろ(丸)

(ii) 接辞による音転によって語幹化したもの、およびそれに類するもの

(記) こや||ル(臥) とガ||ム? (咎) よら||シ(宜)

(紀) ヲろガ||ム(拜)

(万) とガ||ム(咎) とバ||ス(飛) とマ||ル(留) アドモ  
フ(率) こハ? (強)

B 複合語的性格をもつと思われるもの、および複合より生じ

た形

(記) そダタク(叩) とダル(照) ナド

(紀) オとナフ (行) オとナフ (喧響) タのム (頤) よサツ  
ラ (吉葛)

(万) ことワリ (理) ナゴリ (名残) ナど、アど、ヤドル  
(宿) とハ (永久) モとナ (本無) のタブ (宣) タのム  
(頤) アと? (跡)

C、o (甲) ↓ō (乙) の混同によって生じたと思われるもの

(万) ソラ (空) ミカど (朝廷) タどキ (方便) ハろハろ  
(遙) ナぞフ (准) イサよフ (猶予) アそフ (遊)

右の事例中、Cはもともとはa—o (甲)結合であり、万葉集中においてもa—o (甲)の基本的結合は堅持されている。Bの事例は複合語の色彩が強く、ほとんど基本的な結合単位とは思われない。Aの場合にも(i)に見える事例は、そのほとんどがō—aの形に接辞が付いたもので、逆にa—ōの形で無い点に不安が残る。したがって、a—ōの基本的結合は(i)に見える「そ」(乙)音節を中心とした、アそ、カそ、マそ、そバの四語と「ろ」(乙)を含む同音異義の、マろ (自称、と「丸」)の二語が僅かに挙げられることになる。このことは、次に挙げるa—o (甲)の豊富な事例に比して、やはり顕著な結合上の差異ということができらるだろう。

比較の都合上、a—o (甲)の結合事例を挙げると、

(イ) 名詞

(記) ソラ (空) サト (里) ハト (鳩) カド (門) カモ (鴨)  
マヨ (眉)

(紀) ソラ (空) サト (里) ハト (鳩) マヨ (眉)

(万) ソラ (空) サト (里) マヨ (眉) ソマ (杣) トガ (梅)

カド (門) カド (角) ハハソ (柞) アロジ (主) ミサゴ  
(鵞)

(ロ) 形容詞

(記) タノシシ (楽)

(紀) タノシシ (楽)

(万) タノシシ (楽) カソケシシ (幽)

(ハ) 動詞

(記) ソナフ (畏) アソフ (遊) アラソフ (争) マト

フ (惑) カヨフ (通) イサヨフ (猶予)

(紀) アソフ (遊) アラソフ (争)

(万) コガール (焦) ソバフ (戯) アソフ (遊) カゾフ

(数) ナソフ (准) アラソフ (争) サドフ (惑)

タドル (通) カヨフ (通) イサヨフ (躊躇) カガヨフ

フ (耀) サマヨフ (迷)

(ニ) その他

(記)

(紀) ハロ (遙)

(万) ナゴ (和) ナヨ (柔) ハロ (遙) アソソ (仄)

以上の事例で明白なように、ア列とオ列(甲)との結合は、名詞・形容詞語幹・動詞語幹・その他に安定した結合を以て現われる名詞においてはa—o、o—aの両形、名詞以外の場合においてはa—oの結合順序で現われる傾向が顕著である。

右のōおよびoの、ア列との結合関係を見るに、ア列と結合すをオ列はo (甲)の場合が基本的な結合単位であり、a—ōの結合関係はaの性質の改変によるものか、音韻変化または類推の結

果生じた二次的な性格をもつものであるうと思われる。もちろんその場合に *o* および *ö* が不動の結合的性格を堅持していたとは考えられない。とくに *o* (甲) はこれまでも *i* *u* よりの派生<sup>(5)</sup> (一部派生)、<sup>(2)</sup> *ö* よりの派生、<sup>(3)</sup> *a* *u* などの連母音による合成、等のさまざまな説が提出されているように、二次的な派生音であるとする見解も有力である。しかしながら、その発生についてはともかく、*o* *ö* が全く混同する前の、ある時代において、*o* *ö* の母音の相違によって、意義弁別の機能を果たしていたこともまた確実である。

(イ) 一音節語

- a コ (甲) 子、籠、小、粉      こ (乙) 木、代名詞  
 b ソ (甲) 十、磯、麻      そ (乙) 背衣代名詞、助詞  
 c ト (甲) 戸、門、聰 (銳) と (乙) 助詞  
 d ノ (甲) 野      の (乙) 助詞  
 e モ (甲) 妹      も (乙) 助詞  
 f ヨ (甲) 夜      よ (乙) 世、瓣、吉

(ロ) 動詞

- a (甲) 越ス、(乙) 来ス      b (甲) 恋フ、(乙) 乞フ  
 c (甲) 越ユ、(乙) 臥ユ      ? d (甲) 問フ、(乙) 訪フ  
 ? e (甲) 殺ル、(乙) 取ル      ? f (甲) 添フ、(乙) 副フ

*o* *ö* の対立をもつ一対の語は、右の事例のようにそれほど多数の痕跡を見出せるものではなく、一方においては

- (イ) (乙) コル (代る、凝る、懲る?)  
 (ロ) (乙) ソム (染む、始む)  
 (ハ) (乙) ム (飲む、折む)

(一) (乙) のル (告る、乗る)  
 (二) (甲) モル (漏る、守る、盛る?)  
 (三) (乙) よル (繕る、因る、寄る)  
 などの語に不均衡にかたよっている場合もあり得る。このような対応、分布の差異は、その音節結合の傾向と共に、*o* *ö* の発生、生長、消滅の過程をそれぞれ暗示するものがあると思われるが委細は別の機会をまつこととする。

三

上代におけるオホヲ三音節の使用事例とその用字はおおむね次のようなものである。

「オ」

- (1) 隅田八幡社鏡銘  
 意。柴沙加宮  
 (2) 元興寺露盤銘  
 阿米久爾意。斯波羅支比里爾波弥己等  
 意。等加斯、等意。奴弥  
 (3) 天寿國曼荼羅繡帳銘  
 阿米久爾意。斯波留支比里爾波乃弥己等  
 (4) 上宮記逸文  
 意。富々等王  
 (5) 那須國造碑  
 意。斯麻呂  
 上宮聖德法王帝説  
 阿米久爾於。志波留支廣庭、阿米久爾意。斯波留支比里爾波乃弥己等、和何於。保支美 (歌謠)

(7) 古事記

意(歌謡)

オキ(沖) オキめ(人名) オサカ(地名)  
オスヒ(襲) オの(己) オヒシ(大石?) オフヲ(大魚) オホ(多) オホ(大) オホサザキ(人名) オホネ(大根)

オモハ、オモへ(思)

(本文)

日子國オケツ命、オケツヒメ命、オケ王(命、天皇)  
ヒコオス王、オスヒ(襲) オの(己) オの(己) オフヲ、オホアマヒメ、オホカムツミ命、オホギタシヒメ、オホケ命(王、天皇) オホタタネコ、オホタムワケ、オホトのデ神、オホナビ、オホホト王、オホミワ、オホヤマとクニアレヒメ命、ツブラオホミ、ウツシオミ、オレ、ワニ之ヒフレノオホミ

淤(歌謡)

オの(己) シマ、オキ(沖) オキ(置き) オキめ(人名) オシテルヤ(枕詞) オスヒ(襲) オソブラヒ(押) オチ(落ち) オトタナバタ(人名) オハ、オヒオへ、(負) オホ(大) オホクニヌシ(神名) オホサカ(地名) オホネ(大根) オミ(臣) オモハ、オモヒ(思) オイ(老)

(本文)

オカミ神、聞オカミ神、オキ嶋、大帯日子、オシロワケ命(天皇) オト山津見神、オの(己) ころ嶋、オボ鉤オミツヌ神

於(歌謡)

オロス(織ろす) オハ(負は) (但し、この二例とも諸本淤)

(8) 訓注

(本文) オキ(奥)

隠(本文) オキ之三子嶋

(8) 日本書紀

意(本文) オホカラ國、オル村(朝鮮) オタラ(百濟人名)

オシヤマキミ(人名) 鬼部達率オシ(人名)

淤(歌謡) オホミキ(大御酒)

(本文) オトナヒ(喧響) オウ宿禰

於(歌謡) オカ(置か) オキめ(人名) オキタチ(起立ち) オコナヒ(行ひ) オサカ(地名) オシテル(枕詞) オシヌミ(忍海) オシ(押し) オチ(落ち) オの(己)

オハ(負は) オバセル(帯ばせる) オホイシ(大石)

オホ(大) オホ(多) オホサカ(大坂) オホネ(大根) オホバコ(人名) オホマへ(大前) オホモノヌシ(大物主) オミ(臣) オモシロキ(面白き) アヒ

オモハ、オモフ(思) オモホユル(思ほゆる) オヤ

(親) オヤジ(同じ) オル(織る)

(本文) オカミ(監) オシハラヒ(截) オホアナムチ(大己貴) オホキタ(碩田) オホヒルメのムチ(大日靈貴)

オミ(使主) オモ(母) オモテ(面) オユ(老) オ

ろけ(人名)

億(歌謡) オキ(沖)

億(本文) オキ洲(異同アリ、隠カ) オキ(同上) オケ王(天皇)

飫(歌謡) オキ(沖) オキ(置き) オシ(地名) オシ(押し)

皇

億(本文) オキ洲(異同アリ、隠カ) オキ(同上) オケ王(天皇)

億(歌謡) オキ(沖)

億(本文) オキ洲(異同アリ、隠カ) オキ(同上) オケ王(天皇)

億(歌謡) オキ(沖)

億(本文) オキ洲(異同アリ、隠カ) オキ(同上) オケ王(天皇)

乙 (歌謡) オとタナバタ (弟織女)  
 礮 (本文) オノごろ鳥

(9) 万葉集

意: ウチオキ (うち置き) オイツク (老づく) オカ、オキ (置)  
 オカシ (置カシ) オキ (沖) オキマろ (人名) オクカ (奥  
 処) オクリ (送り) オンヒラキ (押しひらき) オチ (落ち)  
 オの (己) オヒ (追ひ) オホキミ (大君) オホニ (凡に)  
 オホホシク (愜) オモ (母) オモテ (面) オモハ、オモヒ  
 オモフ、オモヘ (思) オモホユ、オモホユル (思) オヤ (父  
 母) オよし (老よし?)  
 於: オカ、オキ、オク、オケ、オケル、オケレ (置) オカレ  
 (置) オカミ (櫃) オキ (沖) オキソ (息嘯) オキナ (翁)  
 オキナガ河波、オキナサビ (翁さび) オギろナキ、オク (奥)  
 オクカ (奥処) オクツキ (奥津城) オクヤマノ (枕詞)  
 オクラ、オクリ、オクル、オクレ (贈、送、後) オコセ (遣)  
 オサへ (押さへ) オン (押し) オンテル (枕詞) オンシ  
 テル宮、オンテルヤ (枕詞) オンナベ (押しなべ) オンシベ  
 (磯辺) オンワケ (押しわけ) オそ (鈍、遅) オソキ (襲  
 衣) オソブル (押そぶる) オタハフ、オチ、オツル (落)  
 オと (音) オナジ、オナジキ (同じ) オの (己) オのツマ  
 (己妻) オのとモオのヤ、オのレ (己) オバセル (帯ばせ

る) オハル (生はる) オひ、オフ、オフル (生) オビ (帯)  
 オヒそ筋、オヒ、オフ、オヘル、オフセ (負) オホカル、  
 オホキ、オホク、オホケ、オホミ (多) オホキミ (大君)  
 オホクメ (大久米) オホサ、オホシ、オホセル (生) オボ  
 ツカナキ、オボツカナク (覺束無) オホどれル、オホナム  
 チ (大汝貴) オホニ (凡) オホ野ろ、オホの浦、オホヒ (覆  
 ひ) オホブネの (枕詞) オホホシク (愜) オホヤガハラ  
 (地名) オホろカニ (凡) オホキグサ (草) オめガハリ (面  
 面変り) オめホ (思) オモ (面) オモ (母) オモカゲ (面  
 影) オモガタ (面形) オモガハリ (面変り) オモシロキ (面  
 面白き) オモハ、オモヒ、オモフ、オモヘ、オモヘラ、オ  
 モヘリ、オモヘル、オモヘレ (思) オモハハ (思) オモハ  
 ユ、オモハユル、オモハルル (思) オモホサ、オモホシ、  
 オモホシキ、オモホシメシ、オモホス、オモホセ、(思)  
 オモホユ、オモユル、オモホエ (思) オモヤ (面輪?) オ  
 ヤ (父母) オヤジ (同じ) オよツレ (妖) オラビ (叫び)  
 オろカニ (愚) オろシ (下) オろスエ (下ろす免) 服部オ  
 ユ、フリオコシ (振り起し) ミオモフ (御面)

憶: オホキミ (大君)

応: オビ (帯)

飢: オウの海

(10) 常陸風土記

意支 (沖)

(11) 出雲風土記

意: 意恵、意宇、意陀支社、意支都久辰為命、許意嶋、伊雲意

保須美比古佐和氣能命、意美豆努命、伊怒意保須美比古佐  
倭氣能命、意保美社、意保美小川、意保美浜、意能保浜、  
意美豆努命

於：都於嶋、於豆振崎

隱：隱岐

(12) 播磨風土記

意：賀意、理多之谷、意伎、意比川、意保和知（人名）、意奚（人  
名）意美（人名）

於：於和、於和村、於奚（人名）

邑：邑宝里

(13) 豊後風土記

意：志努汗意拘（人名）

於：於簡美（蛇籠）、玖磨噲於（噲？）

(14) 肥前風土記

意：意登比賣（弟媛）

噲：球磨噲噲

(15) 続日本紀宣命

意：オダヒニ（穩ひに）オのガ弱兒、オホキ（大  
き）

於：オダヒニ（穩ひに）オのモオのモ（己）オホセ（仰せ）オ

ホマシマス（大御坐）オモジキ（主じき）オモフけ（面  
向）

オモホサク（思）オよツレ（妖）オヤ（親）

(16) 新詠華嚴經音義私記

於：オのガ（己）オのレ（己）オシフス（抑）

矣：オろそカニ（疎）のチクイオよボスナ（後悔無及）

(17) 仏足石歌

於：フミオケル（置）ウツシオキ（置）オとレル（劣）オホミ

（多）オホミアと（大）オホキミ（大）オツ（畏ツ）

「ホ」

(1) 上宮記逸文

凡牟都和希王、意富々等王、乎富々等大王

(2) 上宮聖德法王帝説

善岐々美郎女、佐富女王、播磨國揖保郡、和何於保支美（歌  
謡）

(3) 法隆寺金堂四天王像光背銘

藥師德保

(4) 古事記

富（歌謡）

クニのホ（秀）ヤチホコの（八千の矛）オホクニヌ

シ（大國主）オホカハラ（大河原）オホキミ（大君）

オホサカ（地名）オホサザキ（人名）オホタクミ

（大匠）オホネ（大根）オホマへ（大前）オホミヤ

（大宮）オホムロヤ（大室屋）オホキコ（大猪子）

オホミキ（大御酒）オホラ（大魚）オホケク（多）

とホレ（通）とホとホシ（遠）ハヒモとホろフ、イ

ハヒモとホリ、

（本文）ホと（陰）ホとタタライススキヒメ命、ホラ（洞）

オホ臣、オホアマヒメ、オホカムツミ命、オホギタ

シヒメ、オホケ命（王、天皇、諸本異同アリ）オホタ

タネコ（命）オホタムワケ、オホトのヂ神、オホナ

ビ、オホホと王、オホとと王、ワニ之ヒフレのオホ

ミ、ツブラオホミ、オホミワ之大神前、オホヤマと

クニアレヒメ命、山田之そホド、そホリ神、とホシ  
郎女

本(歌謡)

ホナカ(火中)マホるバ(秀)ホダリ(秀)ホツエ

(上ツ枝)ホツモリ(秀)ホムタのヒのミコ(人名)

ミガホシ(欲)とよホキ(祝)ホキクルホシ(祝キ

狂)ホキもとホシ(祝キ廻)シマリもとホシ(廻)

ウラコホシ(恋)イホチ(五百箇)シホ(潮)ニホ

どり(鳩鳥)ミホどり(鳩鳥)ヤホニよし、

(本文)

ホキ歌、ホムチワケ命、大江之イザホワケ命(王、

天皇)オホホど王、サホビコ王(命サホビメ命、サ

ホ穴太郎之別、サホ、よそタホビメ命、ヲザホ王、

ヲホど命

菩(歌謡)

カムホキ(祝)

(本文)

天之ホヒの命、天ホヒ命(神)

蕃(本文)

ミホと(陰)

番(本文)

ホと(陰)ホ(の)ニニギ命、天津日高日子ホのニ

ニギ命、日子ホのニニギ命、天津日子ホのニニギ命

品(本文)

ホムツワケ命

煩(歌謡)

ヒハボそ(細)のボリ、のボレ(登)

(本文)

オボ鈎、のボ野

(5) 日本書紀

保(歌謡)

ホキ(寿き)カムホキ(神寿き)とよホキ(豊寿き)

ホシ(欲し)ホツエ(上ツ枝)オモホユル(思ほゆ

る)クルホシ(狂ほし)とホヒと(遠人)フゴモ

リ(ふほごもり)

(本文)

ホクラ(神庫)ホサキ(祝之)ウホナ(免穂名)オ

ホキタ(碩田)オホヒルメのムチ(大日鬘貴)カム

ホサキ(神祝)ミホ(三穂)

富(本文)

オホカラ国(大加羅)そホ県、ウルそホリチ干(新

羅王)ホラモチ(新羅人名)こホリチカ(加羅人名)

カホセ臣、ホど(人名)のびこホリ(半島地名)

褒(歌謡)

シホ(塩)

(本文)

ホそき(曼椒)ホナシアガリ(无火あがり)ホのス

ソリ(火のすそり)ホホ(標火)ホムタ(鞆)オホア

ナムチ(大己貴)そホリのヤマ、(添山)とホル(

行去)のボ野

報(歌謡)

ホリ(欲り)ミカシホ(みかしほ)

譜(歌謡)

オホバコ(人名)

費(歌謡)

オホイシ(大石)

倍(歌謡)

ホチ(半島村名)

イキどホろシ(憤ろし)ニホどり(鳩鳥)マホラマ

(本文)

イカシホこ(嚴矛)ホホ(標火)

朋(歌謡)

ホ(秀)ホシ(欲し)オホキト(大き門)オホキミ

(大君)オホケク(多けく)オホサカ(地名)オホ

ネ(大根)オホマへ(大前)オホミキ(大御酒)オ

ホミフネ(大御舟)オホムロヤ(大室屋)オホモの

ヌシ(大物主)オホろカニ、のボリ、のボル、のボ

レ(登)よるホヒ(寄ろほひ)

哀(歌謡) ホル(欲る) イホ(五百) ウシホ(潮) オホキミ(大君) オホタチ(太刀) オホマ(大前) オホヤ

け(大宅) コホシキ(恋しき) シホセ(潮瀬) そホ

チ(沾ち) とホラセ(通らせ) のボリ(登り) ヲサ

ホ(小佐保)

袍(本文) ホツマクニ(秀真國)

陪(歌謡) モとホシ(廻シ)

菩(本文) ヤホ(漢人名)

本(本文) こホ阜(加羅國王名)

頰(歌謡) のボレル(登れる)

(6) 万葉集

保…アサガホの(枕詞) アサミホミチ、アシホヤマ、アホ山、

イカホ、(地名) イキどホル) 憤る(イナサホそ江、イハ

ホ(巖) イホチ(五百ち) イホ磨、イホリ(庵) オホキ草

オホカル、オホキ、オホク、オホケ、オホミ、(多) オホ

(大) オホクめ(大久米) オホサ、オホシ、オホセル(生)

オホミマ、オホセ(負) オボツカナ、オホどレル、オホナ

ムチ、オホニ(凡に) オホのウラ、オホヒ、オホブネの(

枕詞) オホホシク、オホヤガハラ、オホるカニ(凡ろかに)

オめホ、オモホエ、オモホサ、オモホシ、オモホシキ、オ

モホシメシ、オモホシメス、オモホス、オモホセ、オモホ

セル、オモホユ、オモホユル(思) 垣ホ、カホガハナ、カホ

どり、カホバナ、カホヤガヌマ、カリホ(仮庵) キホヒ(

鏡ひ) ツクホリ、クロホのネろ、コホシキ、コホシク(恋)

こホリ(水) サカのボル、サホ、シホ(潮、塩) シホひ、

シホフネの、シホホニ、シホミ、シラとホク、そホ船、そ

ホ零、タカチホのタけ、タマホこの(枕詞) タモとホリ(

廻) ツボスミレ、とどこホリ、とへタホミ、とホ、とホカ

とホキ、とホク、とホけ、とホミ、とホシ(遠) とホシロ

シ、とホラセ、とホリ、(通) とりオホセ、ナホ(猶) ホ

(穂) ニホとりの(枕) ニホハ、ニホハシ、ニホハス、ニ

ホハセ、ニホヒ、ニホフ、ニホヘリ、ニホヘル(匂) のボ

ラ、のボリ、のボル、のボレ(登) ハホ(遣ほ) ホシ(星)

フセイホ(伏庵) ホカ(外) ホキ、ホク(寿) ホこり(誇)

ホサル、ホス(干) ホシ、ホシキ(欲) ホツエ、ホツタカ

ホツテ、ホど(程) ホどけ(解) ホととギス、ホとホと(

殆) ホどろニ、ホビこり、ホホカシハ、ホホマレ(含) ホ

よ、ホリ(欲) ホリエ、ホるボサ(滅) マそホ、マホラ、

ミツホ國、ムスボレ(結) モとホリ(廻) ヤホこ(八矛)

富…シホフネ、とホツヒと(枕詞) フタホガみ、ホころへ(誇)

ホととギス、ホるニ、吾オホキミ、

寶…サホ山、シホ(潮) とホリ(逆) ニホ鳥、ニホハサ、ニホ

ヒ、ニホク、ニホヘル(匂) ホホカシハ、ホめ(賞め)

凡…オホニ

朋…そホフネ

抱…アホ(逢ほ) アヤホカ(危) イカホのネろ、オホ野ろ、オ

モホス(思) サどホミ(遠) とホカ、とホキ(遠) ニホフ

(匂) ハホ(遣ほ) モホ(思ほ) カホ(顔) シホフネの、

煩…オホホシク、オホるカニ、のボル(登る) ホるボサ(滅)

ミツボ(水泡)

(7) 常陸風土記

保：伊保利(庵り)

(8) 出雲風土記

保：斯保爾社、美保。(郷、社、濱、埜) 三保社、布奈保社、伊

農意保須美比古佐和氣能命、伊努意保須美比古佐倭氣能命

意保美(社、小川、濱) 宇礼保浦、意能保浜、保乃加社

富：那富乃夜社

(9) 播磨風土記

保：伊保山、美保山、英保。(村、里) 小保。巳(人名) 攝保郡、

意保和知(人名)

善：阿善大神

宝：邑宝里

富：宇知賀久牟豊富命、阿富山

報：伊射報和氣命

(10) 豊後風土記

保：保都米

(11) 新詠華嚴經音義私記

保：ホコ(矛) ホカシキカタチ(他形) ソリのホレル良(隆起)

のチクイオよボスナ(後悔無及) ユルホシ(縦)

(12) 仏足石歌

保：ホとけ(仏) オホミ(多み) よそホヒ(装ひ) オモホユル

(思ほゆる) オホミアと(大御足跡) ホろフ(滅ぶ) オホ

キミ(大君)

(13) 続日本紀宣命

保：イとホシミ(憐しみ) オホキ(多き) オホセ給フ、オホマ

シマス、思ホス、よろこボシ(喜ほし) 廻ホリ、ホニ(頰  
に)

富：とホラシ、とホラス(通) オモホサク(思ほさ)

「ヲ」

(1) 天寿國曼荼羅繡帳銘

乎：乎沙多宮

(2) 上宮記逸文

乎：乎非王、乎波智君、乎富等大公王

(3) 船首王後墓誌

乎：乎姿陶宮

(4) 古事記

袁(歌謠) キ(尾) キ(助詞) キ(命) キヤ(小屋) キブネ(

小船) キダニ(地名) キカ(岡) キコ(愚) キス(

食す) キダチ(地名) キヂナミ(拙劣) キとツ(彼

方) キツ(地名) キノ(小野) キハリ(地名) キマ

ヘスクネ(人名) キミナ(女) キムロガタケ、キリ

キ(居) アキ(青) アキナ(菁) アキニよし(枕

詞) アリキ(地名) オフキ(大魚) コキ、サキ、

リ(躍) とキ(十) ナリ(波折) マキ(申す)

キ(助詞) キケ王(命) キケツヒメ命、キザホ王、

キドヒメ、キとコ(男) イツシラヒメ(神) キナベ

王、キナベ郎女、キホど命、キマろコ王、こキろこ

キろ、とキ之別、火キリ命、キス(食)

遠(歌謠)

キ(緒) キ(命) キ(男) キ(助詞) キキ(除き)

キとメ(乙女) アキ(青)

(5) 日本書紀

火ヲリ命  
ウ(歌謡) ヲ(命) ヲ(助詞) ヲサカ(小坂) ヲシ(駕籠) ヲ

ダテ(地名) ヲヂ(老翁) ヲチカタ(彼方) ヲトメ

(少女) ヲバヤシ(小林) ヲハリ(尾張) ヲマヘス

クネ(人名) ヲリ(居り) ヲろガミ(拌み) アヲ(

青) アヲニヨシ(枕詞) カタヲカヤマ(片岡山)

サラ(棹) サラバシ(さ小橋) マヲス(申す) ムカ

ツヲ(向ッ峰)

(本文) ヲグナ(童男) ヲタケビ(雄詰) ヲヂ(老翁) ヲチ

カタ(彼方) ヲとコ(少男) ヲトメ(少女) ヲナベ

(小願) ヲヤラフル(飲喫) ウツシキアヲヒとグサ

(顯見蒼生) サヲバシ(さ小橋) ヒタヲ(頓丘) マ

タのヲ(人名) ヲマろ(人名) ヲナラ(人名)

鳴(歌謡) ヲ(助詞) ヲサホ(小佐保) ヲシケク(惜しけく)

ヲしろ(尾代) ヲそネ(地名) ヲムラ(小村) アセ

ヲ、アリヲ(在丘) アヲニヨシ(枕) ウヲ(魚) ナ

ヲリ(波折) マヲス(申す)

(本文) ヲタケビ(雄詰) サヲシカ(牡鹿) スサのヲ尊

鳩(歌謡) ヲ(助詞) ヲセ(飲せ) コハダヲとメ(こはだ嬢子)

シヤヲ(掛声) とヲカ(十日)

乎(歌謡) ヲ(助詞) ヲムレ(小丘)

(本文) ヲモクルルニ(輻輳然)

廻(歌謡) ヲ(助詞)

弘(歌謡) ヲ(助詞) ヲ(緒)

惋(歌謡) カルヲとメ(輕少女)

(6) 万葉集

袁：タヲリ(折り) マスヲヲ(丈夫) ヲ(助詞) ヲレ(居れ)

遠：アチカヲシ、アヲニヨシ(枕詞) 英ヲ浦、アヲヤギ(青楊)

キコシヲス(聞こし食す) ヲ(助詞) とヲ依、十ヲニ、マ

スヲヲ(丈夫) マヲシ(申し) ヲ(助詞) ヲサメ(治め)

ヲシケ(惜しけ) ヲ智(地名) ヲチ(復) ヲツツ(現) ヲ

とコサビ、ヲとメサビ、ヲとメ、ヲへ(終) ヲヲ、ヲル(

居ら) ヲリ、ヲル、ヲル(折り) ヲリカヘシ、ヲヲリ

乎：アハヲろ、アヲ(青) アヲニヨシ(枕詞) アヲのウヲ、ア

ヲヤギ(青楊) アヲヤナギ(青柳) イナヲカモ、ウヲ(魚)

オホヲそどり、香ヲレル、ササヲヲギ(荻) サヲ(棹) サ

ヲシカ(牡鹿) サヲドル、サヲビキ、シツヲ(賤男) シヲ

レ(妻) タヲヲ、タヲリ(手折) ツヲの埒、ナカダヲレ、

ハツヲ、ハツヲバナ、マスヲタケヲ、マスヲヲ、マヲゴモ

マヲサ(申) マヲシ、マヲス、ミヲ、水ヲツクシ、ミヲビ

キ、ヲ(峯) ヲ(緒) ヲ(尾) ヲ(助詞) ヲ(小) ヲカ(

岡) ヲガみ河泊、ヲキ(招)、ヲサギ(兔) ヲサムル(治)

ヲサめ、ヲサヲサ、ヲシ(駕籠) ヲシカ(牡鹿) ヲシキ(

惜しき) ヲシケ、ヲシケク、ヲそろ、ヲチ(交) ヲヂ(翁)

ヲチカタ(彼方) ヲチ野、ヲツクハ、ヲツツ(現) ヲテモ

ヲとコ(男) ヲどこ(床) ヲトツ口、ヲ等女(地名) ヲト

メ(乙女) ヲどり(跳) ヲバナ、ヲバヤシ、ヲフのウヲ、

ヲフのサキ、ヲへ(終) ヲフル(終) ヲミナ(女) ヲミナ  
ベシ(花) ヲラ(折り) ヲリ(折り) ヲラ(居) ヲリ(居  
り) ヲリカヘシ、キル(居) ヲレ(居) ヲる田、ヲヲリ、  
鳥…ヲ(助詞)

越…アマヲとメ(乙女) ヲ(助詞) ヲチ(復) ヲ智野、ヲとメ  
ヲ(乙女)  
怨…ヲシミ(惜)

(7) 常陸風土記  
乎…ヲハツセヤマ、ヲ(助詞) ヲとコ(男) ヲトメ(乙女) ウ  
シヲ(潮) アヲニ(青土)  
袁…建部ヲころ命  
出雲風土記

(8) 鳥…(神) スサのヲ命  
乎…(神) スサのヲ命  
袁…(神) スサのヲ命

(9) 播磨風土記  
乎…ヲケ(麻笥) 葦原シコヲ命、ヲめ(小目?)  
袁…ヲフ山、ヲケ天皇、ヲめ(小目?)

(10) 肥前風土記  
袁…ヲ(助詞?素カ) 變比ヲマろ  
仏足石歌  
乎…ヲ(助詞) マスヲヲ(丈夫) ヲヂナキ(拙劣き) ヲへ(終  
へ)

(12) 新訳華嚴經音義私記  
乎…ヲシム(惜しむ)

(13) 続日本紀宣命  
乎…ヲ(助詞) ヲヂナシ(拙劣し)  
遠…ヲ(助詞)

四

前節に挙げた「オ」「ホ」「ヲ」各音節の結合事例の中から、  
地名・人名および外国関係の個有名詞に類するものを除き、ほぼ  
一語的結合と思われるもの、または語幹乃至は語根と推定される  
ものの用例と結合関係を示せば次のようになる。

一、「オ」音節の結合関係

(イ) ウ列との結合

(記) オスヒ(襲衣)  
(万) オク(奥) オクリ(送り) オフセ(負)

(ロ) ア列との結合

(記) オカミ(寵)  
(紀) オカミ(寵) オヤ(親) オヤジ(同) オバセル(帯)  
(万) オカミ(寵) オヤ(親) オヤジ(同) オナジ(同) オバ  
セル(帯) オサへ(押) オハル(生) オラビ(叫) オタ  
バフ

(宣命) オヤ(親) オダヒニ(穩)

(豊後風土記) オカミ(寵)

(イ) オ列乙類との結合

(記) オと(弟) オも(面) オの(己) オそブラヒ(押) オも  
フ(思) オロス(織)  
(紀) オと(弟) オの(己) オとナヒ(喧響) オコナヒ(行)  
(万) オの(己) オそ(遅) オそキ(襲衣) オと(音) オよツ

レ(妖) オろカ(愚) オよし(老?) オこセ(遣) オこシ(起) オそブル(押) オろシ(下) オろスエ(下)

(肥前風土記) オと(弟)

(宣命) オの(己) オよツレ(妖)

(仏足石歌) オトレル(劣)

(華嚴経音義私記) オの(己) オろそカ(疎) オよボス(及)

(一) 書き分けのないオ列との結合

(記) オホ(大) オボ鉤

(紀) オモ(面) オモヒ(思) オモホユル(思) オホろカ(凡)

(万) オモ(面) オモ(母) オホ(大) オホ(多) オホ(凡)

オホホシ(凡) オボツカナシ、オホドレル、オモフ(思)

オモホユ(思) オホヒ(覆)

(宣命) オモジ(主) オモブけ(面向) オホ(大) オホセ(仰)

オモホサク(思)

(出雲風土記) オホ(大)

(仏足石歌) オホ(大) オホ(多)

二、「ホ」音節の結合関係

(イ) ウ列との結合

(記) クルホシ(狂ほし)

(紀) ホムタ(輓) クルホシ(狂ほし) フホごもり(ふほごもり)

り)

(万) ミツボ(水泡) ツボスミレ、ツクホリ、ムスボレ(結ばれ)

(華嚴経音義私記) ユルホシ(縦)

(回) ア列との結合

(記) ホラ(洞)

(紀) ホサキ(祝)

(万) カホ(顔) ナホ(猶) ホカ(外) ホホマレ(含)

(華嚴経音義私記) ホカシキ(他)

(イ) オ列甲類との結合

(記) コホシ(恋し)

(紀) コホシ(恋し)

(万) コホシ(恋し)

(一) オ列乙類との結合

(記) ホこ(矛) ぼそ(細) ほと(陰) とホ(遠) とホレ(通) のぼり(登) もとホシ(廻) もとホリ(廻) もとホろフ(廻)

(紀) ホこ(矛) ホそき(曼椒) とホ(遠) とホル(通) イキ

どホろシ(憤) もとホリ(廻) モとホシ(廻) のボリ(登) よろホヒ(寄) そボチ(沾)

(万) ホこ(矛) ホそ(細) そホ舟、そホ零、ホど(程) ホと

ホと(殆) ホどろ、ホよ、ホろニ、ホろボス(滅)、

とホ(遠) とホル(通) シラとホフ、とどこホリ(滞)

こホリ(氷) のボル(登) タモとホリ、ホこり(誇) ホ

ころへ(誇) ホどけ(解) ホととギス、

(宣命) イとホシミ(憐しみ) よろこボシ(喜ほし) とホラン

(通) とホラフ(通)

(仏足石歌) ホとけ(仏) よそホヒ(装) ホろブ(滅)

(華嚴経音義私記) ホこ(矛) オよボス(及)

(回) 書き分けのないオ列との結合

(法王帝説) オホ (大)

(記) オホ (大) オホ (多)

(紀) オホ (大) オホ (多) オホ<sub>ル</sub>カニ、オモホユル (思)

(万) オホ (大) オホ (多) オホス (生) オホセ (負) オボツ

カナシ (覚束なし) オホドレル、オホニ (凡) オホヒ

覆) オホホシ、オホ<sub>ル</sub>カニ、オモホユ (思) オモホス (

思) シホホニ、ホホ (類)

(出雲) オホ (大)

(仏足石歌) オホ (多) オモホユル (思)

(宣命) オホ (大) オホ (多) オホセ (仰) オモホサ (思)

三、「ヲ」音節の結合關係

(イ) ウ列との結合

(紀) ウラ (魚) ヲグナ (童男)

(万) ウラ (魚) ヲツツ (現)

(イ) ア列との結合

(記) ヲカ (岡) アヲ (青) マヲス (申)

(紀) ヲカ (岡) アヲ (青) サヲ (竿) マヲス (申) ヲヤラフ

ル (飲喫)

(万) ヲカ (岡) アヲ (青) サヲ (竿) マヲシ (申) ヲサメ (

治) ヲサギ (兔) ヲサヲサ

(常陸風土記) アヲニ (青土)

(イ) オ列乙類との結合

(記) ヲコ (愚) ヲとコ (男) ヲとメ (乙女) ヲとツ (彼方)

こヲ<sub>ル</sub>、とを (十) とヲヲ、サヲどり、八俣ヲ<sub>ル</sub>チ

(紀) ヲとコ (男) ヲとメ (乙女) とヲ (十) ヲ<sub>ル</sub>ガミ (押)

(万) ヲとコ (男) ヲとメ (乙女) ヲとツ (彼方) サヲどり、

とヲ依、オホヲそどり、ヲそ<sub>ル</sub>。

(常陸風土記) ヲとコ (男) ヲとメ (乙女)

(イ) 書き分けのないオ列との結合

(紀) ヲモクルルに (輻轡然)

以上の結合例を見るに、オホヲ三音節ともにオ列甲類の結合上の特徴であるウ列との結合例をもち、またオ列乙類の特徴であるオ( )との多数の結合例をもっている。したがって、オホヲ三音節はその結合的性格から、(イ)甲類相当音節(イ)乙類相当音節の二類の音節に分けて考えることができる。そしてまた、これら二類に分けられる性格は、かつてオホヲ三音節が甲乙いづれか一類の音であり、史の変遷の結果、他の甲乙両類の書き分けのある音節に併行して類似の性格をもつようになった結果であろうと解するよりも、当初オホヲ三音節にも甲乙二類の区別があり、その結合的性格の特徴が、痕跡的に上代に遺存していると見る方が、より妥当な解釈であると思われる。それ故、ここで問題となるのは、二、三の先学の説もあるように、書契時代に入っはたして甲乙両類に区別され記録されたものであるかどうか、ということである。

推古遺文や大宝戸籍帳に見えるオホ音節について、これまで甲乙両類が書き分けられていたとする報告は無いようであるが、周知の如く古事記に關してはシ音節をも含めてオホ音節に書き分けを認めようとする研究がある。それらの中でも、戦前の池田毅氏「古事記における志斯の仮名遣について」(国学院雑誌四十ノ四・六)および永田吉太郎氏「古事記に於けるシオホの文字遣に

ついで」(国語と国文学昭九・十一)が共時論的に甲乙二類の書き分けの明確な一線を追求されたのに対し、先年、馬淵和夫氏は「古事記のシオホのかな」(国語学31)において、通時論的に把握することによって、特殊仮名遣の崩壊過程の様相を探ろうとされた。しかしながら、それらは綿密な作業と秀れた見通しの下に慎重に論証をすすめられたにも拘らず、明快な結論を齎らずに至らなかつたようである。

馬淵氏の出された結論は、オについては

1 乙類オのみで構成している語根の、はじめの $\ddot{o}$ は $\circ$ になる傾向がある。

2 甲類オを語頭にもち、第二音節に $i$   $u$ をもつ語根はその $\circ$ が $\ddot{o}$ になる傾向がある。これは $i$ (前舌)  $u$ (中舌)というせまい母音に影響されたもので、 $\ddot{o}$ は $\circ$ よりくちのひらきのせまい中舌母音であつたとおもわれる。

3 一例しかない「弟」「面」「淤藤山」「淤煩鈎」などの語頭の $\ddot{o}$ は、おそらく $i$ の傾向と規を一にするもので、もと $\ddot{o}$ であつたものが $\circ$ になつたのであろう。

4 オの混同は、語頭においてかなりみられ、 $\ddot{o}$ より $\circ$ へむかう傾向がみられる。

5 一音節語(of otos)は混同しにくい、これは音韻の混同がただちに語義の混同に影響をおよぼすからであらう。

これらの結論は古事記に現れたオ音節を次のように判定することによって支えられているのである。(但し、数字はその事例数、(ロ)に見える括弧の数字は違例数を示す)

淤(甲 $\circ$ )

正用 (ロ) オフ(生)6、オツ(落)5、オシroh(人名)4、オフ(覆)3、オカミ(神名)3、オフ(負)2、オイル(老)

1、オス(押)1、オソブラフ(押)1、オル(織)1、オミヅ(神名)1、

意(乙 $\ddot{o}$ ) (ロ) オレ(オの)6(2)、オミ(臣)2(4)、オスヒ(襲)2(3)、

正用 (イ) おケ(神名)1、おス(神名)1(ロ)、おホキミ(大君)

7(3)、おホ(大)98(2)、おホネ(大根)1(1)、おホミヤ(大宮)1(1)、おもフ(思)3(7)、おキ(沖)1(6)、おク(置)3(1)

右のほかは、正用例がなく誤用例のみと判定されたのは次の各語に含まれているオ音節である。

誤用(乙 $\ddot{o}$ を $\circ$ で表わしたもの)

淤登(弟) 淤母(面) 淤藤山津見神、淤煩鈎

以上がオ音節のすべてであるが、はたして右の判定は、さきの結論を支えるものであろうか。

結論の1は、 $\ddot{o}$ — $\ddot{o}$ 結合が $\circ$ — $\ddot{o}$ 結合に移行する傾向を指摘したものである。その事例は

淤ホ(大) 淤もフ(思)

の例であるが、次の例も右と同じ傾向のものとして $\ddot{o}$ — $\circ$ 化の結果生じた誤用であるとされた。(結論3)

淤も(面) 淤と(弟) 淤ど山津見神、淤ボ鈎

これはかなり重要な変化であると思われる。というのは、上代における $\ddot{o}$ — $\ddot{o}$ 結合は、母音調和現象の一型態として、その痕跡といわれながらも未だ強固な結合力を保持していたものであつて、

○(甲) ○(乙)の混同が見られる音節にあっても、 $\ddot{o}$ — $\ddot{o}$ 結合はよく本来の結合型態を堅持しているので、右の事例に見られる第二音節が $\ddot{o}$ である「面」「弟」「思う」「涕騰」の語頭の「オ」が $\ddot{o}$ であるとするならば、 $\ddot{o}$ — $\ddot{o}$ という、きわめて特異な結合を想定することになる。これは第二音節の $\ddot{o}$ が、第一音節の $\ddot{o}$ — $\ddot{o}$ 化を妨げることができなかったということになると、 $\ddot{o}$ の性格の重要な変革を意味することになる。

しかしながら、「大」「面」の語頭のオが、たしかに $\ddot{o}$ 的な性格をもっていたと推定できる現象がある。

(イ) ワ期大王(我大君) 万一・五二他十例

(ロ) 影友(影面) 万一・五二八カゲツおも

(ハ) 背友(背面) 万一・五二、二・一九九八そツおも

これらはいづれも語頭のオが $\ddot{o}$ でなく $\ddot{o}$ であった時に生じた音韻現象であるが、すでに古事記において $\ddot{o}$ 化の傾向にあったとすれば、それ以前に成立した現象であるとしなければなるまい。オホ、オモの各音節に甲乙両類の区別が消失していた万葉時代に惹起した現象とみるなら、当然初期万葉におけるオホ、オモ、のオに乙類の性格を推定し得ることになるからである。したがって、ここではそうした現象を追求することによって、なお解明さるべき問題が残ることを示唆するにとどめて、はたして $\ddot{o}$ — $\ddot{o}$ 化の主張が一貫した立場をとっているかということを検討していこうと思ふ。

オ列乙類のもっとも特徴的な $\ddot{o}$ — $\ddot{o}$ の強固な結合、その第二音節 $\ddot{o}$ の拘束力をふり切つて $\ddot{o}$ 化する傾向にあったとするなら、より拘束力のなかったと思われる( $\ddot{o}$ 以外の)他の音節と結合し

ている $\ddot{o}$ 、または単音節 $\ddot{o}$ の中には、もと $\ddot{o}$ であったもので、いち早く $\ddot{o}$ 化した語が存在する可能性がある。もっとも、馬淵氏は結論5において、一音節語(of ot os)は音韻の混同がただちに語義の混同に影響をおよぼすので、混同しにくいと述べられたが of に限って見ても(生<sup>オ</sup>う、負<sup>オ</sup>う、覆<sup>オ</sup>う)の三語が氏の正用とされるオ(甲)の例に見えている。この三語は語頭の音韻 $\ddot{o}$ によって語義を区別されているわけではないし、前々節にも指摘したように、たしかに $\ddot{o}$ — $\ddot{o}$ の対立によって語義を区別する語も存在するが いづれか一方に片よって存在する場合も多いので、一音節語 of os がもとのままの音韻を保持していることはできない。とくに直接それらの対立語であるべき of  $\ddot{o}$  ts の一音節語が明瞭に指摘されていないことは、of ot os の $\ddot{o}$ — $\ddot{o}$ の混同でべつに語義の混同をもたらすものでもないことが明らかである。したがって、二音節語(および多音節語)はもちろん、一音節語にあっても $\ddot{o}$ — $\ddot{o}$ 化の傾向はあったと見るのが、結論1によって齎らさるべき当然の帰結である。

そのような見通しのもとに、同氏が正用とされたオ甲 $\ddot{o}$ を語頭にもつ各語を検するに、もとオ乙 $\ddot{o}$ であったと推定し得る若干の語を発見することができる。

(イ) 淤曾ブラヒ(押そブラヒ)  $\ddot{o}$ s— $\ddot{o}$ ts

(ロ) 淤呂ス(織ろス)  $\ddot{o}$ r— $\ddot{o}$ ts

(ハ) ハタおり $\ddot{o}$ ハとり(波等利、波止利)

(ニ) 淤ミ(臣)

cf ウツシおミ $\ddot{o}$ ウツ曾ミ(万二・一六五)他五例

ナカツおミ $\ddot{o}$ ナカ等ミ(万十七・四〇三—)

(イ)の例は、オ列を語幹にもつ場合は派生的關係の語にあつても同じ音韻を重ねる(すなわち、 $o \rightarrow \bar{o}$ となるか $\bar{o} \rightarrow \bar{o}$ となるかのどちらか)ものであつて、もし語頭オが $\bar{o}$ であつたなら淤蘇 $o \rightarrow \bar{o}$ となるべきところである。しかるに第二音節は $\bar{o}$ であるので、この語はまず $\bar{o} \rightarrow \bar{o}$ という結合型式をもつて成立したと推定できる。したがつて、もしオス(押)との間に派生關係が認定されるなら、オス(押)のオも当然もともとは $\bar{o}$ であつたと思われ、馬淵氏がこれを正用とされたことに反する。

右の推定を助けるものは、次の(ロ)の事例である。(ロ)はオル(織る)―オロス(織ろス)の派生關係をもつと思われるが、第二音節が $\bar{o}$ であるので、当然語頭のオも $\bar{o}$ であると推定し得る。ここまでは(イ)の例と軌を一にするが、オル(織る)に關してハ等(止)りという合成語があるのは、この語が *fata+ori*∨*fatori*であつて *fata+ori*∨*fatori*でないことを意味する。(つまりオス(織る)の語頭オはかつては明瞭に $\bar{o}$ であつたと推定できるのである。<sup>(11)</sup>)

このように音韻変化の上からも、また音節結合の基本的性格の上からも、語頭のオが $\bar{o}$ であつたであろうと推定できる傍証があるのを無視して、「淤」字による表記を基として(イ)(ロ)の語のオを $\bar{o}$ とし、正用と判定するのはかなり危険であるときえ思われる。したがつて、そうした判定の上を立て出された結論も十分の信憑性をもち得ないことはやむを得ないのである。

以上によつて、馬淵氏が指摘された語頭オの $\bar{o} \rightarrow \bar{o}$ 化の現象はそれを支えるべき結論1345の間に矛盾があり統一された性格をもつていないこと、およびその結論の基礎となつた判定作業そ

のものに好証となるべき客観性のないことが指摘できたと思う。この結論1345が $\bar{o} \rightarrow \bar{o}$ 化現象をその基底として推論されたのに対し、ひとり結論2のみは、それとは逆に $\bar{o} \rightarrow \bar{o}$ の傾向も存在することを指摘したものである。その理由として、第二音節の狭母音*u*が語頭オに影響し、 $\bar{o}$ から、より口のひらきのせまい $\bar{o}$ になつたとされた。しかしながら、これを証する事例ははなはだ少ない。たとえば、

臣…(正用) 淤 $\bar{m}$ 2例 (誤用) 意 $\bar{m}$ 4例

襲…(正用) 淤 $\bar{h}$ 2例 (誤用) 意 $\bar{h}$ 3例

(注) 正用、誤用の指示は馬淵氏の事例表による。

などは一見好証例のように見えるが、先にも挙げた通り、オミ(臣)にはウツ曾ミという形もあつて、どちらかといえば、もと $\bar{o}$ であつたと推定されるので、右の混同は例証とはなし難い。また後接*i*母音が $\bar{o} \rightarrow \bar{o}$ 化の原因になるのであるなら、*i*母音の前の $\bar{o}$ はよりよく保存されそうなるのであるが、同氏の事例表では

沖…(正用) 意 $\bar{k}$ 1例 (誤用) 淤 $\bar{k}$ 6例

と、まったく $\bar{o} \rightarrow \bar{o}$ 化の傾向を妨げていない反対の例が見える。したがつて、結論2の後接狭母音の影響ということはずまず考えられないのであつて、右の語の正用、誤用の判定の規準もなら明示されていない。

結論2は、他の1345と異つて、ひとり $\bar{o} \rightarrow \bar{o}$ 化傾向を指摘したものであつたが、その根拠たるや薄弱で、結論としてその傾向を指摘し得るほどの特徴を備えていない。

以上の検討にて分明の如く、馬淵氏の結論12345は、崩壊過程を捉えたものとしては、結論相互に矛盾や不統一があり、個

々の事例の判定に不十分な点が認められる。しかしながら、それに若干の修正を加えると、淤意両字によって甲乙の書き分けの意図があったことを認めようとする立場からは、大きくいつて次の仮設が提出できることはたしかである。

△仮設Vオは、音節結合の法則をも崩壊させるほどに、 $\ddot{o} \downarrow \circ$ 化の傾向をもっていた。

例1  $\ddot{o} - \ddot{o}$ 結合すら $\circ - \ddot{o}$ 結合に移行する過程にあった。

(イ) オホ(大) 39(2)、大君7(3)、大根1(1)、大宮1(1)、思う3(7)

(数字は $\ddot{o} - \ddot{o}$ 結合例、括弧の数字は $\circ - \ddot{o}$ 結合例)

(ロ) すでに $\circ - \ddot{o}$ に移行したもの

淤と(弟) 淤も(面) 淤ど(山名) 淤ボ鉤

例2 一音節語はすでに $\downarrow \circ$ 化している。

(イ) もと $\ddot{o}$ であったもの

オス(押) オソプラヒ(押) オル(織) オツ(落) オイ(老)

(ロ) もと $\ddot{o}$ であるか $\circ$ であるか不明のもの

オフ(生) オフ(魚) オフ(覆)

例3 もと $\ddot{o}$ であり、 $\ddot{o} \downarrow \circ$ 化のため混同例をもつもの

オ(の、レ) (汝) 2(6)、オミ(臣) 4(2)、オキ(沖) 1(6)、オク

(置) 3(1)

(注) 括弧内は $\circ$ となった事例数

例4 次の語は一字単用であるが、正用誤用の判定が難しい。

(イ)  $\ddot{o}$ 表記のもの おケ(神名) 2、おス(神名) 1

(ロ)  $\circ$ 表記のもの オシロ(人名) 4、オカミ(神名) 3、オミツ

(神名) 1

右のように整理すると、この△仮設Vに対する違例は、次の一例

のみとなる。

襲(オスヒ) : 意スヒ 2例 淤スヒ 3例

音節結合の法則によれば、ウ列と結合するオは $\circ$ であるので、右の例は $\downarrow \ddot{o}$ の混同現象で逆の方向の感があるが、△仮設Vに対する重大な障害にはならぬと思われる。

さて、しからば古事記の述作者は、はたして右の仮設を支える、淤意をもってオの甲乙両類を書き分けようとする明確な意図をもっていたのであるか。結論から先にいえば、それについては私は否定的な立場をとる。

古事記歌謡を岩波文庫本の番号により百十三首を検するに、淤意の使用例は、(78)の「於」を便宜上諸本によって「淤」とすれば次のようになる。

淤 上 8、中 6、下 33、計 47  
意 上 1、中 14、下 18、計 33

しかしして淤意両字を複用した歌は、わずかに次の五首であって、他はいずれも淤意どちらかの単用である。これらの歌謡は編纂当時、あたらしく一字一音の型式に記述されたと思われるが、もしオ甲乙を淤意によって書き分ける意図があったならば、それは一首の中に共存して使用された場合、もっとも鋭い意識で書き分けられたものと期待してよいはずである。その共存の例は次の通りである。

(61) 淤母ハズ(思) 意富キコ(大) 意富キコ(大)

(77) 淤呂ス(織) 意富キミ(大)

(90) 淤母ヒ(思) 意富ヲ(大) 意富ヲ(大) 意母ヒ(思)

(98) 淤富キミ(大) 淤ハム(負) 意富マヘ(大)

(118) 淤きめ (置一) 意きめ (置一)

右の例に見る限り、共存して使用された場合には必ず淤の表記に  
違例が指摘される。もっとも(118)の場合は淤意いづれが違例である  
か、にわかには決め難いが、とくに(90)(98)(118)は同一語にそれぞれ淤  
意をあてていることに注意してよからう。歌謡の原資料が口承型  
態であったか、あるいは清寧記に見られるような記録体として遺  
されていたものであるか明らかではないが、そのいずれであって  
も、もし忠実に伝承を記録したものであるとすれば、これら $\circ\ddot{o}$   
の混同は更に遡った時代に擬すことができる。また、当時すでに  
 $\circ\ddot{o}$ が混同していたために、原初型態を忠実に再現できなかった  
ものであれば、歌謡の述作者は一語を二様に発音することに何等  
の抵抗をも感ぜず、そのまま二種の音韻として記録したことになる。  
これはまさに書き分けではなく混同である。というのは、(97)  
においては対句の結構中に(思ひ出)という句が四回使用されて  
いるがすべて淤字で表記されている。これを $\downarrow\circ$ 化したための淤  
表記であるとすれば、同一条件でも次のような例がある。前掲(90)  
の淤意は、前半の結句と後半の結句すなわち(思ひ妻あはれ)の  
繰返しの語頭のオの表記に使用されている。この同一文句の繰り  
返しは、歌謡が口誦的なものであればあるほど、より良く呼応し  
て保存されやすいものであるにも拘らず、語頭のオを異種の音と  
して記録したと見ることは、歌謡の述作者は、(97)の場合と比較し  
て、一語を同一環境にありながら、二種の音に表記することにさ  
して深い注意を見せなかったということになる。逆にいえば、 $\downarrow$   
化を忠実に表記するために淤を使用したものではなさそうであ  
る。それは次の表記を見ても推定できることである。

(92) 曾能淤母ひ妻あはれ *sono-omōizuma ahare*

前後を $\ddot{o}$ ではさまれているオ $\ddot{o}$ は、たとい $\ddot{o}\downarrow\circ$ 化の傾向があつ  
たとしても、 $\circ\ddot{o}\circ\ddot{o}$ のように、二つの $\ddot{o}$ の中間にあつて $\circ$ を保  
持することは、他の如何なる音韻環境にあるオより、至難のこと  
と思われる。まして(92)において同じく(思ひ妻あはれ)の語頭の  
オが、一つは $\downarrow\circ$ 化しながら、も一つは $\ddot{o}$ を保存しているのを見  
ても、より保存されやすい音韻環境にある(92)の $\ddot{o}$ が $\downarrow\circ$ 化したと  
見ることは、はなはだ無理なことであると思われる。これら  
はみな、淤意をもって古事記述作者がオの甲乙の書き分けを意図  
したということを認めようとするところからくる歪みであつて、  
それは鋭い意識をもって、オの混同状態を書き分けようとした  
ものではないと思われる。

淤意の漢字原音の差が、わがオ音節の甲乙を書き分けるに十分  
なものであつたか、はなはだ疑問なのであるが、万葉集に至つて  
オの常用字母が於となり、意は特定の人しか使用されなくなつ  
たのみでも、淤意の差は用字の交替変遷とみるのが穩當であり  
古事記本文における淤字使用の性格もそれを裏づけるものがある。  
古事記はまさにその交替期にあつたと思われる。したがつて  
書き分けを前提として立てたさきの仮設は、 $\wedge$ 仮設 $\vee$ 以上の積極  
的論拠をもち得ないことになる。

ホ音節の書き分けについては、はやく永田吉太郎氏が「古事記  
のホの仮名に関する雑考」(国語と国文学12の6)の中で違例と  
なる語を考察され、書き分けの基本線を確保しようとした。ま  
た馬淵和夫氏は使用字母を(ハ)木菩(介母 $i$ なし一等)甲類、(向)富番  
品(介母 $i$ あり三等)乙類と分け、誤用は「本」字を使用すると

ころに生じていることを実証しようとした。これらから判断すると、古事記のホは若干の違例を含みながら、ほぼ書き分けられたかに見える。したがって、もっとも論議のまことなる誤用例もしくは存疑の事例について検討することとする。

富をもってする表記に違例がないように見えるのは本文の39例訓注の1例、歌謡の40例が $\text{ö} \rightarrow \text{ö}$ 結合で占められ、残る歌謡の1例と本文の2例がその他の結合例であるから、富が古代におけるホ音節表記の常用字母であった場合には、書き分けの意図如何にかかわらず違例が少なくなるのは当然である。富は萬葉集にも承け継がれた字母であるが、ホ甲に多用された本は上代を通じて古事記以外ではほとんど使用されなかつた稀字母に近い性格をもっている。富は推古遺文、金石文、大宝戸籍帳に多く見え、漸次、保にとつてかわられるが、本の使用は古事記に集中しているのはたして、ホ甲を表記するため古事記の述作者が使用したのか、用字法的な意味あいのものであるのか、注意すべき点である。それはさておき、違例と目されるのは次の事例である。

1 (イ)  $\text{ö}$ くにの富も $\text{ö}$ ゆ

(ロ) (5)ま本ろば、本つもり、本だり

これら(イ)(ロ)が意味的にすべて同一語源であるとはいきれないが $\Delta$ 秀 $\vee$ の意味にとつて「国の秀」「ま秀ろば」とする説によればおそらく混同であろう。

2 (神代記)内者富良富良(洞、うつろの意)

ア列と結合するオ列は基本的には $\text{ö}$ 甲である。よつて存疑。

右の2例が富を使用した事例中、 $\text{ö}$ と結合しない例のすべてである。

3 (イ)品牟都和気命(垂仁記)

(ロ)本牟智和気命(垂仁記)

垂仁記には右の外、沙本(ヒコ、ヒメ、地名、一穴太郎)の例が見え、富は使用されない。(イ)は系譜に(ロ)は説話中に見えるので、原資料の差(ほむつ、ホむち)によるものか明らかでないが、品がもともと有尾 $\text{ö}$ を生かして、品 $\text{ö}$ (大)・品 $\text{ö}$ ・品夜と表記されていることから(記に14例)、(イ)はむしろ異例の表記であろう。書き分けがあるとすれば $\text{fo} \parallel \text{mum}$ の複合であろうか。

4 (イ)品 $\text{ö}$ (序、仲哀記1、赤神記5例)

(ロ)本牟多能比能美古(応神記歌謡)

$\Delta$ 鞆 $\vee$ をホムタという例からすれば、もと $\text{ö} \rightarrow \text{u}$ 結合であることが望ましい。前例と併せて個有名詞の表記は問題が残る。なお(ロ)の歌謡(40)は本富の共存する二首の中の一首であるが、富が「才富(大)サザキ」(2例)に正用されたのに対して、はたして書き分けの意図で本を使用したのか疑わしい。

5 (イ)(110)斯麻理母登本斯(清寧記)40本岐母登本斯(仲哀記)

(ロ)(14)波比母登富呂布(神武記)85波比母登富呂布(景行記)

(イ)の例は当然(ロ)と同じく富表記でありたいところで、とくに(110)は才富キミの例と共存し $\text{ö}$ は本キクル本シと共存する。書き分けを明確に意図すべきところである。すでに $\text{fo} \rightarrow \text{fo}$ 化していたとするなら、本で表記された他の事例もそのまま正用とするわけにいかない。

歌謡においては右の二首に見られるように、共存する場合は常に本は富を使用すべき位置に使用されている。これは本文においても同様であつて、その意味では本と富に使用意識に差があると

は思われない。

6 (イ) 意富本杼王 (允恭記)

(ロ) 意富、杼王 (応神紀 4例)

歌謡を除く本文中で本富が共存する天皇記は允恭記だけであるが右のように混用であることは明らかである。次の例も書き分けのたてまえからいけば、富で表記さるべきかと思われる。

7 袁本、杼命 (武烈記、継体記)

継体記には「意富邪天皇」が見えるので、本富の共存する例かとも思えるが、真福寺本、延佳本以外は「意邪」(清寧、顕宗、仁賢、継体記 4例とも)とあるので、保留とする。したがって、本文における本富の使用は各天皇記とも允恭記を除いていずれか一字の単用である。

富使用：(上巻) 神代 (中巻) 神武、安寧、孝靈、孝元、崇神

景行、応神 (下巻) 允恭、安康、雄略、用明

本使用：(上巻) なし (中巻) 孝昭、開化、垂仁 (下巻) 仁徳

履中、允恭、清寧、顕宗、武烈、継体

単用による統一のため、本文歌謡ともその中に誤用例が含まれるが、複用共存の場合は、歌謡本文ともに誤用例とされるものである。これらのことを考えると、本富の書き分けは甲乙の対応というより、用字法的な色彩が非常に強いようである。たとえば毛母は、歌謡において(4)(5)(6)(8)(9)(10)(11)(12)に共存するがすべて明確に書き分けられ、しかもモ(甲)も(乙)はオ列oöの結合として他のオ(甲)オ(乙)の特徴と一致している。

これに反して、淤意、本富は共存する場合は必ず違例であり、結合例の特徴も他のオ(甲)オ(乙)の特徴に類似しない点があ

る。この点、毛母の場合ほどにその信憑度は高くはないわけである。したがって、本表記は次のように分類してその性格を考えるべきであろう。

(1) 地名、人名関係

(イ) サホ16 イザホ6 ヲザホ2 よそタホ1

(ロ) オホホど1 ヲホど2 ホムチ1 ホムタ1

(注) 数字は用例数、(ロ)は混用例がある語

(2) (イ) もと、ホ(甲)と推定されるもの

コホシ(恋) 1 クルホシ(狂) 1

(ロ) もと、ほ(乙)と推定されるもの

もとホシ(廻) 2 ホ(火) 1

(イ) 混用例のある語

マホるバ(秀) 1 ホダリ(秀) 3 ホツモリ(秀?) 1

(ロ) 甲乙いずれか不明のもの

(I) ホ(上) 3、ホ(百) 2、ホシ(欲) 1、ホク(祝) 4

(II) シホ(塩) 2、ニホ(鳥) 1、ミホ(鳥) 1

右のように分けると、本による書き分けは必ずしも明確でなく、むしろ混同とでもいえる状況である。したがって、(2)の(ロ)をそのままホ(甲)とし正用視するのも妥当性を欠くと思われる。

本字を甲類視するいま一つの障害は、字音の面に存する。本字の所属する混韻(韻鏡、外転第十八合、一等韻)は、切韻音 *geio* と推定され、同転同等の字母に存(記) 傳(紀) があり、いずれも「ぞ乙」に使用されている。この本字と富字(韻鏡第三十七開、宥韻三等)との差は、馬淵氏によれば一等(介母なし)と三等(介母あり)の差であるという。しかし、当時書き分けら

れていた他のオ列甲乙兩類は、字音の点からは、ほぼ(甲類)後舌対(乙類)中舌の対立と推定されているので、同じ乙類系統の字音の中で、一対三等の対立があったとしても、それがはたして他の甲乙兩類の対立と同様な意義をもつ対立であるかは速断できない。毛(甲)字と同転同等の唇音に抱宝韻などの字があるので、古事記の筆録者が国語音韻を体系的に把握し、なおかつ漢字音を熟知して、転写に際して在来の帰化人や外国人よりも高度の信憑性をもつというのであれば、乙類系統の本富をとって甲乙兩類の対立した音を表わすという不手際はなさなかつた筈である。

(イ) 甲類

模韻…古故胡・蘇素・度土・怒努・路盧

侯韻…斗・樓漏

豪韻…高・刀・毛

冬韻…宗

鐘韻…濃・用

(ロ) 乙類

之韻…其恭(意)

哈韻…乃能

侯韻…母

登韻…曾・登等騰騰・能

魚韻…許・叙序・與余豫(淤於)

のようにきわめて明瞭に後舌系(甲類)と中舌系(乙類)字母にわかれて使用されている。「オ」音節表記の場合は、オ甲を表記する適当な字母―すなわち、ワ行ヲと区別するため合口性をもた

ぬ、頭子音のない後舌的。の字母に乏しいので、乙類系統の字母の中で韻形に若干の相違がある字母を、便宜的に対立させて使用するということも考えられるが、「ホ」音節の場合は、富(有韻)木(混韻)番・蕃・煩(元韻)品(寝韻)菩(模韻・海韻)となっていて、字音の点から見れば乙類系統の本を甲類相当の字母とし、また甲類系統の番蕃煩を乙類相当の字母とする馬淵氏の説明は、かなり無理な弁別であると思われるのである。つまり、ホの場合は、オ列甲乙兩類を書き分ける古事記筆録者の基本的な字母使用に合致しないのである。

以上の諸点を総合して見ると、「ホ」音節の書き分けも、「オ」音節の場合と同様に、十分の証跡をもっていないと思われる。それはまた、崩壊過程を反映していると思われる。十分に分え得るものでもない。ということは、文証ある時代において、オホ兩音節はすでに甲乙の対立を解消し、その区別を失っていたのである。

ヲ音節は字音の点から見る限りにおいて、文証ある時代に入つて、書き分けられた痕跡は存在しない。

(模韻) 烏鳴鳩乎

(灰韻) 廻

(元韻) 袁遠怨越

(換韻) 惋

(登韻) 弘

右の中で、乙類系統の廻・弘は書紀に用いられたものであるが、書き分けのために使用されたものでないことは明白である。したがって、文献時代には、主として甲類系統の字母で転写されてい



らないと思われる。前節において詳細に検討したように、オ音節は甲乙の区別をすでに失っていたと思われるが、使用字母は意添を中心とする中舌系字母であった。が、このことは直接にオの音価を示しているとするわけにはいかない。オが〔o〕であった場合には、それを表わす適当な字母に乏しいので、東豪侯韻所属字母よりも、やはり意添を使用することになるだろうから。

## 五

すでに与えられた紙数を超過しているので、個々の詳論は他日の機会に譲り、オホヲ音節の基本的な特徴をまとめて結論とする。

(1) オホヲ音節は、上代に残存する事例から見ると、それぞれ少数のウ列と結合し、多数のオ列乙類との結合例を持っている。したがって、三音節ともに、上代以前の古代日本語の時代において、それぞれオ列甲類相当と乙類に相当する音韻的対立と結合的性格を持っていたと推定される。もっとも、この少数のウ列との結合が否定されると、オホヲ音節はもと乙類であった可能性が強くなる。

(2) 右の甲乙両類相当音節は、上代においてはすでにその区別を失い、甲類音節に吸収統一されたと思われる。他のコントノモヨロ音節において、漸次中舌的要素を失ったことが特殊仮名遣の崩壊過程であったことから類推して、オホヲの場合も同様の過程を通ったものと思われる。

註(一) 有坂秀世博士「古代日本語に於ける音節結合の法則」(「

上代音韻攷」所収)

木下正俊氏「来す」と「越す」(万葉23号所載)

有坂秀世博士「新撰字鏡に於けるコの仮名の用法」(「国語音韻史の研究」増補新版所収)

なお、東国方言については、

遠藤嘉基博士「東歌防人歌仮名遺考」(国語国文昭7・10)

福田良輔先生「奈良朝時代東国方言の成立について」(上)

(中)(下)文学研究37・38・40輯

亀井孝氏「方言文学としての東歌・その言語的背景」(文学

昭25・9)

註(二) 「古事記におけるもの仮名の用法について」(国語音韻史の研究増補新版一〇一頁)

註(三) 上代音韻攷三十二頁

註(四) 続紀45詔(神護景雲三年・七六九)に都與久(剛)の例が見えるが時代が下る。

註(五) 鶴久氏「上代特殊仮名遣の消滅過程について」(「野」字の訓の変遷をめぐって」(文学研究55輯)

註(六) 大野透氏 A Study of the Ancient Pronunciation of Japanese and Chinese 音声の研究(一九五七)四六三頁

服部四郎博士「日本語の系統」(古事記大成第三卷38頁)に大野晋氏の直話として引用されている。

正宗敦夫氏編「万葉集総索引」

大野晋氏「上代仮名遣の研究」(日本書紀の仮名を中心として」)

森山隆編「古事記漢字索引—歌謡訓注篇」

「古事記漢字索引—本文篇(一)」

のそれぞれの索引を参照した。

註(外) この「費」を「ホ」の仮名と見るか「ひ(乙)」の仮名と見るか、諸家に説がある。

有坂秀世博士「上代音韻攷」三九五頁

龜井孝氏「古事記祝詞」(日本古典文学大系) 一五九頁

頭注十八。

境田四郎氏「意悲志」考(女子大文学10号)

註(中)

この「廻」を大野晋氏は「エ」に読まれたが、武田祐吉博士(記紀歌謡集全講) 土橋寛氏(日本古典文学大系・古代歌謡集) 有坂秀世博士等は「ヲ」とされる。「エ」の仮字として使用した例には「笑：廻牟」(新訳華嚴經音義私記)がある。

註(乙)

神代紀に見える「斯凶梨俄未」(倭文神)の例は *situ-ori*、*visiori* と考えられるので、その際の「オリ」の「オ」は甲類であったと思われる。ハと(乙)リ、シト(甲)リの合成がいつ行われたか知る由もないが、オリ(織)のオが *o↓o* の傾向を辿ったと見るより、*ö↓o* の傾向にあったと見る方が音韻変化の上からも自然であろうと思う。

註(甲)

富・本の条を参照されたい。以下、天皇紀による分別は便宜的ではあるが、従来説かれた本文における資料性の相違すなわち帝紀と旧辞、各時代層による文体・用字の相違、筆録者による記録の改変統一などに平行して、各天皇紀にそれぞれ文体用字上の特徴があることを踏まえているのである。その詳細は別稿を予定している。

註(内)

上代仮名遣の研究一九六頁